



Title	相手の立場になりきれた人
Author(s)	浜田, 宏一
Citation	国際公共政策研究. 2004, 8(2), p. 165-168
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/4546">https://hdl.handle.net/11094/4546</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 相手の立場になりきれた人

エール大学経済学部教授

浜田 宏 一

蠟山昌一さんと（本来なら教授とか先生とかいうべきであるが、ふだんのように呼ばせていただく）はじめて出会ったのは、私がエール大学から帰国した年、1965年であったと思う。彼はまだ院生ではあったが、すでに大人物の風格があった。私はその頃エール大学の博士論文を日本語の本にまとめていたので、その草稿を読んでもらった。「浜田さんの文章は、明快かもしれないが英語のようで、文が短く、木に竹を継いだようでぶっきらぼうです。抑揚を持って流れるように書けませんか？」このようなアドバイスなしには、拙著『経済成長と国際資本移動』が日経図書文化賞をいただくというような幸運は巡ってこなかったであろう。

その頃蠟山さんは、東京大学の修士論文で、館龍一郎先生の指導のもとに、資産選択行動のミクロ的基礎を研究していた。資産選択のスルーツキー方程式を導こうとしていたのである。当時私は、トービン教授のコンジェクチュアの一つとして、資産間の代替性と収益の相関性との関係に興味を持っていた。蠟山さんの開発した枠組みの中で、それがうまく分析できた。

現在の日本の例でいえば、ゼロ金利下では、貨幣も短期債券も同じ収益率を持つので、両者は完全代替であるという近頃の議論はその一応用である。その共同研究の結果が、S. Royama and K. Hamada, "Substitution and complementarity in the choice of risky assets", D. D. Hester & J. Tobin (eds). *Risk Aversion and Portfolio Choice Cowles Foundation Monograph no. 1968* である。蠟山さんはその後、あれもけっこう引用されていますと教えてくれた。

ただその出版の段階で、ある国際雑誌に受理されたものの、その後われわれの仕事に似たものが某大学の博士論文にあるという編集委員が現れたりして、(実際は類似の程度は弱いものであったが)、彼はレフェリー制度のあまりに人間的な側面にだまがっかりしたらしい。自分は、論文出版競争を続けてゆく気はないといった気持を持ったように思われる。(この点については、蠟山教授の大阪大学退官講演を参照されたい。) より世の中を変えられる、政策発言を本来の仕事にしたいということになったのであろう。後に政策構想フォーラム(代表の廣田一氏は、後でのべるようにわれわれがともに住んだ家屋を提供してくださった方であ

る。ここで其他のご恩義とともにお礼を申し上げる次第である。)等での活躍に連なっていくのである。

修士論文の優秀さもあって、蠟山さんはMITに奨学金つきで入学許可をえる。ところがちょうどその頃、彼は東大経済学部の助手(私も当時助手であった)にも任じられることになった。MITに行こうか、助手として当時優れた若手の集まっていた東大で研究、後進の育成を続けるか、彼も、指導教授の館先生も迷ったらしい。結局彼はMIT留学を断念する。あとで、浜田さんがあの時MIT行きを強く勧めてくれたら自分の人生も変わったのといわれたことがある。もし彼がMITでモジリアーニ教授などについていたら、日本の経済学界、金融学界も変わっていたかもしれない。

そのあとすぐに、大学紛争の嵐がやってきた。彼はどちらかという、ノンポリ・構造改革派で、過激ではなかったが、大学、学部の立場にもはっきりと批判的な立場を表明した。学生運動の経験の全くない私は、ただおろおろと仲間に追従することしかできなかった。皆にとって、研究者、教育等の知的活動空白のコストは大きかった。しかし大学紛争は、社会、大学組織について、そしてそこでのイデオロギーの役割について多くを教えてくれた。これについて正面から論ずるには、時間と紙数を要するので別の機会にゆずりたい。

その後、蠟山さんは大阪大学に赴任し大阪を中心に活躍されるようになる。高岡短期大学の学長になってからも、絶えず蠟山さんの精神的ルートは大阪にあった。学長になる以前のことだが、大阪証券取引所が先物市場を開設するために欧米に調査団を送ったことがある。蠟山さんは確か副团长格であったと記憶している。エール大学に転勤する過程にあった私も、アメリカでの調査の部分だけ参加させていただいた。先物とか、デリバティブなどに無知で、無関心だった当時の日本にこの調査団の残した意識改革の意義は大きかったと思う。

日本証券経済研究所では、桐谷維教授の発案で、女性の証券論、近代経済学研究者の養成に熱心であった。その「計測室」から、丸淳子、紺谷典子、首藤恵などの諸教授、著名なエコノミストが育っていった。そこでの蠟山さんとの会話も懐かしい。また、大平首相時代の『文化の時代の経済運営』プロジェクトでは彼が学者側の幹事役を勤めて、長富祐一郎氏を助けていた。私も、そのころ知り合った官界の方々から、最近の内閣府の勤務ではいろいろな事を教えていただくことができた。

蠟山さんは、日本で銀行を通ずる資金の流れに対して、証券市場を通ずる資金の流れが軽視されていることに批判的であった。従来「直接金融」、「間接金融」という区別だけでなく「市場型金融」、「相対型金融」の区別が必要だという日本の金融市場についての重要な性格づけを行ったのは大きな貢献である。彼は忙しいのに、私が編集を手伝っていた“The Palgrave Dictionary of Money and Finance”に日本の金融システムに関するすばらしい論稿を寄せてくれた。

親しいなかでも経済学の根本に触れる点では、二人の見方には微妙な違いがあった。蠟山さんは、公衆をエコノミストが教育できるはずだという面では楽観的であった。「丁寧に、親身に説得すれば、正しいことはわかってもらえる」と彼は考えていた。私は、「わからない人がいても真理は真理」という立場であった。そう言うと、「そうは言っても筋道を立てて説得できないような論理はどこかおかしいのではないのでしょうか」という返事が返ってくる。要するに、説得して世界を動かそうとする立場と、クールに事物を観察し、論理を吟味しようとする態度の違いである。

本当に残念な中で不幸中の幸いは、病に倒れられてから、一度彼の意識が明晰なときに、一度は集中治療室で会うことができたことである。元気なときには、柳沢伯夫金融大臣の下でのレポート書きに費やした努力のことを懐かしがっていた。二度目のときには、奥様にだけわかる筆談で、金融レポートを出すときのいわば同志の池尾和人、神田秀樹、斎藤誠各教授に、「君たちの考え方が正しいのだから、それで続けてがんばってほしい」というメッセージを伝えるようにと表現しておられた。握手して別れるとき、彼の手のひらには力がこもっていた。

以下は、私が蠟山さんの追悼会に寄せた一文に多少書き加えたものである。

「蠟山昌一さんの一生は、経済政策を自分の理想に近づけようという使命に燃えた一生でした。学者が、つい政策に無関心とは言えなくても距離感を持つきらいがあることを絶えずいましめられました。君の一生を通じて、私は経済学だけでなく、学問と経済政策の接点について教えられるばかりでした。

君は、本当に人の立場になりかわって説得することができる人でした。私は人に意見を述べるとき、「私ならこうすると思うが、人はそれぞれ考え方が違うので自分で決めてください。」という形をとるが、蠟山さんは「私が浜田さんだったらこうする。」という言い方でした。年は私より少し若かったにも関わらず、君はまるで兄のように、文章の書き方を教えてくれ、テニス、スキーを教えてくださいました。そういう二重の意味で、君は私の師でした。私が、数年前内閣府に勤め、生まれて初めて行政官になったとき、部屋を訪ねてくれた君が、秘書の喜友名さんに開口一番「浜田さん、つとまっているの？」と聞いたということを知りました。

スキーを習ったときには、八方尾根のたしか兎平といった平坦なゲレンデで、はるか向こうは崖になっていないかと初心者の僕が心配し、「浜田さんにあそこまで滑れるわけがないのだから」といわれた件については、『日経センター会報』に以前書いたことがあります。

君は料理も上手で、グルメでもありました。今思い出すだけでも、大阪の紙なべ、甲子園

の台湾料理、ニューヨークでのモダンな中華料理——生け花の日本的デザインの基調に、フランスのヌーヴェルキュイジーヌ風の中華——などを紹介、というか多くの場合、ご馳走してくれました。いろいろなことが思い出されます。二人でニューヨークのメトロポリタン・オペラに「サムソンとデリラ」を見にいった、装置、歌にすっかりしたこと、そして、そう音楽好きでもなかった彼が、グスタフ・マーラーが好きでマーラーだったら彼がいくはずのウィーン・フィルの切符をブルックナーの曲目だったので私に譲ってくれ、その時大阪フェスティバル・ホールで熱演した指揮者シノプポリももうこの世の人ではないことなど。

私に離婚話が起ってしょげているところを、君はニューヘイブンまできてくれて、聞くところによると、ジェームス・トービン教授と昼食をとりながら、「コーイチをどうしたものか」などと話し合ったということです。そしてアメリカへの適応が不十分で悩んでいた私に、コンピューターを手ほどきしてくれ、孤独のもとで機械と対話することの慰めを教えてくれたのも君でした。そうして、大阪大学の大阪ガス講座にも招待してくれました。甲子園の家に同居までさせていただきました。阪神大地震のときそのお宅が被害に会われたのに、外国にいたことを口実にお見舞いも差し上げなかったのが心残りです。苦しいときあれほど助けてくれた君に、何もお返しができないうちに、君ははるかな世界に旅立ってしまったこと、残念でまことに申し訳ない気持ちです。

奥様には、本当に何を申し上げてよいか分かりません。病床で、蠟山さんは洋子様のごことがとても気がかりな様子でした。われわれもできるだけ奥様をサポートしたいと思います。そして蠟山さんの、本当に価値のある、世のためになったかけがえのない人生を、ともに歩み、助け、そして励まされた奥様に、心から感謝申し上げたい気持ちでいっぱいです。

2003年8月9日

ニューヘイブンにて」

浜田 宏一